

特権とマイクロアグレッションへの気づき —演劇的手法を用いたジェンダーワークショップを通じて—

大城 歩菜・五十嵐 洋己

千葉大学国際教養学部・千葉大学大学院国際学術研究院

Raising Awareness of Privilege and Microaggression: A Gender Workshop Utilizing Dramatic Techniques

OSHIRO Ayuna and IGARASHI Hiroki

要旨

マジョリティは自身の「特権」に無自覚であることが多く、それが「マイクロアグレッション」を通じて差別や不平等を再生産されていることが昨今議論されている。本稿は、高校生を対象にした、特権とマイクロアグレッションへの気づきを促す「演劇的手法」を用いたジェンダーワークショップの実践報告である。演劇的手法を用いた本ワークショップは、LGBTQ+当事者のドキュメンタリー動画視聴とロールプレイングを通して、参加者に性的マイノリティの困難を「内在化（自分ごと化）」させ、自らの特権性とマイクロアグレッションを行っている可能性の気づきを促すことを目的とした。事前・事後のアンケートとワークショップ中のディスカッションの内容を分析した結果、参加者は他者の役になりきる過程で他者の生活世界の内在化が深まり、自らの特権とマイクロアグレッションを行っている可能性への気づきが生まれた。以上より、ジェンダー教育にとどまらず、マジョリティが特権に自覚的になるため教育実践の選択肢に「演劇的手法」が有用であることを示した。

Abstract

Recent discussions highlight majority groups are often unaware of their own privilege, which can lead to the reproduction of discrimination and inequality through microaggressions. This paper reports on a gender workshop for high school students that utilized dramatic techniques to promote awareness of these issues. Employing documentary videos and role-playing, the workshop aimed to facilitate participants' internalization of the challenges faced by sexual minorities and encourage them to recognize their own privilege and the potential for committing microaggressions. Analysis of pre- and post-workshop questionnaires and in-workshop discussions indicated that embodying another person's role deepened participants' internalization of diverse life experiences, leading to an

特権とマイクロアグレッションへの気づき—演劇的手法を用いたジェンダーワークショップを通じて—

increased awareness of their own privilege and the possibility of their own microaggressive behaviors. Thus, the use of dramatic techniques is a useful option not only for gender education but also for educational practices that aim to make the majority conscious of their own privilege.

キーワード

マイクロアグレッション、特権、ジェンダー教育、内在化、演劇的手法

microaggression, privilege, gender workshop, internalization, dramatic techniques

1. はじめに

明治期に「色情感覚異常」又は先天性の疾病だとされていた同性愛が、1990年にWHOが国際疾病分類を改めたことにより、日本でも精神疾患と見なされなくなってから約30年が経過した。現在では、同性愛を問題とするべきではないという流れはもちろんのこと、東京都渋谷区などを筆頭に、様々な地域の自治体がパートナーシップ制度を導入するなど、同性愛を受け入れようとする流れやそれに伴う社会制度や憲法なども見直されつつある。2024年10月30日、東京高等裁判所は同性婚訴訟の控訴審判決において、同性婚を認めない戸籍法が、憲法第14条の「すべて国民は、法の下に平等であって、人種、信条、性別、社会的身分又は門地により、政治的、経済的又は社会的関係において、差別されない。」という条文に反する、と認められたことは記憶に新しい。また、釜野他（2020）の研究によると、日本では同性婚への賛成が6割、セクシュアルマイノリティへの差別禁止を支持する人が7割を超え、制度的な支援を求める人が増えていることが窺える。さらに、日本の企業においても大企業がセクシュアルマイノリティの権利を守る取り組みを始めた潮流も鑑みれば、昨今の日本は、性的指向や性自認にかかわらず、すべての人が尊重される社会の実現を推進しようとしている。

しかし、その一方で、現代において加速する「LGBTQブーム」や「同性愛歓迎ムード」、「多文化共生推進ムーブメント」などの「多様性」に舵を切る日本社会の裏に「見せかけの多様性推進意識」が蔓延していることが指摘されている（岩渕 2021; 元山 2022）。こうした社会の風潮に身を任せ同調していく中で、マジョリティ側が自らを「受容する側」、「支援する側」、「理解する側」と無自覚あるいは自覚的に位置付けること自体が、不公正で不平等が蔓延る社会構造の本質や、自らの持つ「特権」を自覚することの妨げになるという（Greene and Boler 2004）。また、ジェンダー問題は、しばしば「差別」と共に語られることが多い。差別を受けている実感がない人々や差別を行っている自覚がない人々は関心を抱きにくい分野であることから、より一層気づきにくい構造が出来上がってしまっている。このような状況下では、たとえ差別をしていないと思っても、自らが無意識に抱える偏見によって、日常の対面やSNSでの「マイクロアグレッション」（Sue and Spanierman 2010=2020）——言語や行動、環境を通して表現される、意図的あるいは無意識的な小さな攻撃的メッセージ——を介して、

不公正で不平等な社会の再生産に寄与してしまう可能性も孕んでいる。

昨今のジェンダー教育や多様性推進のための教育においては、思いやりや受容する心などの「受動的共感」を育む教育への批判（出口 2021）から、マジョリティ側が持つ特権を「意識化」させることを促すワークショップ形式の教育実践が広がっている（渋谷 2021; 大阪府外国人教育研究協議会 2017; 出口 2021）。本稿は、高校生を対象にした、特権性とマイクロアグレッションへの気づきを促す「演劇的手法」を用いたジェンダーワークショップの実践報告である。このワークショップでは、参加者にLGBTQ+当事者のドキュメンタリー動画を視聴してもらい、本人の役を演じてもらうことで、当事者の世界観を「内在化（自分ごと化）」し、マジョリティ側が持つ特権性や、無意識に行っている「マイクロアグレッション」について、「意識化」より深い「内在化」を促すことを目的としている。また、本ワークショップは、筆頭著者である大城が千葉大学国際教養学部の卒業研究（メジャー・プロジェクト）の一環として企画・実施したものである。つまり、本ワークショップは、大学教員だけでなく、大学生が企画・運営を行える教育実践のモデルの可能性を示すものでもあり、同様のジェンダー教育の普及に貢献するものである。

本稿の構成は以下のようになっている。次節では、本ワークショップのキーワードとなる「マイクロアグレッション」と「特権」の概念を確認し、昨今のジェンダー教育の「意識化」に着目した教育実践を紹介する。次に、「演劇的手法」を用いた教育実践を紹介し、演劇を用いたワークショップが、より深い「内在化（自分ごと化）」を導ける可能性を検討する。第3節では、本ジェンダーワークショップの概要を紹介する。第4節では、どのように参加者である生徒たちが性的マイノリティの人々の生き方を内在化する過程を経て、その後、自らの特権性とマイクロアグレッションを実際に行っていたことの気づきが得られたのかを示す。そして最終節では本研究の知見を整理し、本報告の貢献と限界について論じる。

2. 先行研究

2.1. 特権とマイクロアグレッション

マイクロアグレッションという概念と比べ、「特権」(Privilege)は長らく社会学や人文科学の領域で、階級・社会階層、人種、ジェンダー等の権力と不平等の関係を理解する概念として使われてきた。例えば、アメリカの社会学者であるGerhard Lenskiは自著の*Power and Privilege: A Theory of Social Stratification* (1984)において、特権を、特定の社会的地位、属性、または集団への所属によって得られる、社会的な優位性や利益、そして、他の集団よりも多くの資源、機会、または報酬へのアクセスを可能にする社会的に構築された不平等と捉えた。アメリカのフェミニストであり、反人種差別者であるPeggy McIntoshは自著*White Privilege and Male Privilege*において「特権とは、自分が属する集団のために、自分が何もしていないのに享受できる、目に見えない、無条件の恩恵のことである」(1992: 71)と論じた。

日本において特権への自覚について様々な教育実践を行っている出口真紀子は特権を「自動ドア」にたとえ、社会にはマジョリティへのドアが開きやすい構造があるが、マイノリティには開かないことが多い点を指摘する。そのため、マイノリティからはドアが障壁になることに気づきにくく、ドアのない世界こそが「普通」だと誤解されがちだ、と述べる（くまのみ他 2021）。

マイクロアグレッションとは、言語や行動、環境を通して表現される、意図的あるいは無意識的な小さな攻撃的メッセージのことを指す。この概念は、1970年代に米国の精神医学者であるチェスター・ピアスによって当時の人種差別の形態としてその影響を分析する研究で提唱され、その後1990年代以降のフェミニズムやLGBT運動の高まりとともに、マイクロアグレッションの概念が性差別やセクシュアルマイノリティに対する偏見の分析にも適用されるようになった歴史を持っている。そのため、マイクロアグレッション研究は、公民権運動以降の社会運動とともに発展し、特権への関心の高まりと相互に影響し合ってきた側面がある。

その後2000年代に、心理学者のデラルド・ウィング・スー（Sue & Spanierman 2010=2020）によってこの概念が知られるようになる。スー（Sue & Spanierman 2010=2020）は、マイクロアグレッションには、1. マイクロアサルト、2. マイクロインサルト、3. マイクロインバリデーションの3つ分類されるとした。マイクロアサルトは、意図的に相手を傷つける言動で、露骨な攻撃的メッセージである。マイクロインサルトは、無自覚ながら相手の属性を侮辱するコミュニケーションで、差別を正当化するメッセージが含まれる。マイクロインバリデーションは、相手の感情や経験を無視、否定することで、相手を無価値視するメッセージである。そして、マイクロアグレッションは日常の何気ない、ささいな表現に表出するため、可視化されにくく、受信者も差別だと気づきにくく、それに無自覚な加害者もいる。

2.2. 現代のジェンダー教育や多様性推進を促す教育実践

現代において加速する「LGBTQブーム」や「同性愛歓迎ムード」、「多文化共生推進ムーブメント」などの「多様性」に舵を切る日本社会の中で、ジェンダー教育や多様性推進のための教育はどのように展開しているのだろうか。森茂（2019）は、多文化教育の実践として、日本ではしばしば外国人児童教育、国際理解教育などの文化的多様性の理解や受容に関心が寄せられることが多いと述べ、社会的に弱い立場にある個人や集団に対する関りは、相互理解や思いやり、受容、寛容といった観点を重要視していることを示唆している。また、Greene & Boler（2004）は、特権を持たない側が求めているのは、共感ではなく、公正であり、問題を創り上げている社会的権力に自分自身が関わっていることを認めることであるとし、自らを「受容し共感する側、理解する側、支援する側」に位置付けることが、不公正な社会構造と自らの特権的な利益を理解することを妨げるものとなっていると主張している。さらに、出口（2021）は、今までの学習や教育の中で形成されてきた意識

では、「受動的共感」はできても、自らの立場を振り返り、特権性が社会構造とともに個人の生活にどのように影響を及ぼしているかを捉え、自らの立場を批判的に分析する「気づき」に繋がらないとし、「気づき」を促すための「意識化」が必要であると結論付けている。

自らの持つ特権性への「意識化」を実践する教育の事例として、大阪府在日外国人教育研究協議会（2017）が作成した、大阪版マイクロアグレッションカードの教材がある。この教材は、マイクロアグレッションを通じて無意識のうちに相手を傷つけてしまうような言動について学ぶものである。具体的には、日常生活で起こりうる10種類のマイクロアグレッションの場面をイラストで示し、それぞれの場面における具体的な発言例をまとめている。カードの例としては、在日コリアンが「いつ日本に来たんですか」と聞かれたり、アルバイト先で「日本の名まえはないの」と何気なく聞かれたりするシーンを導入しており、実際に見聞した体験から人種の問題の「意識化」をはかろうとしている。この実践は、「自分も言ったことがある」や、「悪気なく傷つけていた」などとマジョリティ側がマイクロアグレッションに気づくだけでなく、自分の持つ「特権性」を認識させるきっかけにもなっている。渋谷（2021）は、参加者の特権の「意識化」をはかる教育実践として、「特権体験ゲーム」を実施した。このワークショップでは、近距離、中距離、長距離と3チームに分けて、同じゴールをめがけてシュートを打つ。このシンプルなゲームから、自らが持っている距離的特権を持っていない場合は、どのような困難があるのかなどを可視化し、ゲーム終了後にディスカッションを行いそこでの気づきや学びを共有する内容となっている。

上記の大阪府在日外国人教育研究協議会（2017）の教材は、学習者が人種的マイクロアグレッションの場面に気づき、自分の持つ特権性を省みるきっかけとなる。また、渋谷（2021）の「特権体験ゲーム」ではゲームを通じて特権の有無を体感し、ディスカッションで共有することで学生の気づきが促されたと報告している。これらの教育実践を受け、自分自身の持つ特権性を省みるきっかけや自身や他人が特権を持っているか否かを意識化させるワークショップに効果があることから、著者は、より深く「内在化（自分ごと化）」を促せる実践的なジェンダー教育を模索したいと考え、「演劇（ドラマ）的手法」（渡部 2009; 藤井 2019）に着目した。

2.3. 演劇を用いた教育実践の可能性

渡部（2009）は「演劇」の定義を、観客に向けて上演を行うシアターと、観客を想定しないドラマの両方が含意されているとする。特に渡部や著者が着目するドラマとしての演劇は、ドラマを芸術活動という「目的」ではなく、学習活動、表現活動、そして社会に活かす目的とした「ツール」として、教育機関で学習モデルとして用いられるようになってきている。藤井（2019）は、演劇には、他者の立場や状況を「自分ごと化」する、つまり深く理解し共感する効果があると述べる。演劇では、役を演じることを通して、その人物

の人生や経験を疑似体験することができるため、たとえそれが一時的なものであっても、役柄になりきることで、その人物の抱える問題や課題を「自分ごと」として捉え、共感する力を育むことができるという。Winner et al. (2013) もまた、演劇では、役を演じるために、登場人物の性格や背景、置かれている状況、関係性などを鋭く理解し分析することが求められるため、この過程を通じて、学習者は他者の気持ちと立場を理解する気持ちを高め、共感力を育むことができる可能性がある、とその効果を議論する。

本研究は、参加者（高校生）に演劇的手法を用い、性的マイノリティ（LGBTQ+）のドキュメンタリー動画視聴と当事者になりきるロールプレイングから、当事者の世界観を内在化（自分ごと化）し、自らの特権性やマイクロアグレッションへの気づきを促すことを目的とする。この目的に基づき、本稿のリサーチクエスションへの回答を試みる。演劇的手法は、参加者に性的マイノリティの世界観をどのように内在化させ、特権性やマイクロアグレッションへの気づきを促すのか。

3. ジェンダーワークショップの概要

本ワークショップは、筆頭著者である大城が2023年9月2日（土）に、O高等学校2年生の38名（男子生徒15名、女子生徒23名）の生徒を対象に、午前8時15分から午後12時40分までの間、休憩時間を含めて4時間半実施した（表1参照）。以降、本ワークショップに参加した生徒を「参加者」と呼ぶ。ワークショップの内容は、大きく分けて3つのワークによって構成されており、それぞれ、①役作りワーク、②自己紹介ワーク、③ディスカッションである。全体の流れとしては、著者による本ワークショップの概要の説明と自己紹介から始まり、「役作りワーク」では、参加者達が自ら演技をする人物のYouTube動画を視聴した後、各々が担当する役についての役作りワークを行った。その後、「自己紹介ワーク」では、異なる人物の動画を視聴した参加者らとグループを作り、人物自身の役を演じる自己紹介を行い、他の参加者から当事者としての質問を受ける形式をとった。そして最後に、「ディスカッション」では、ワークショップでの学びを振り返った。また、今回ワークショップにO高等学校の担当教員をしているM先生（本ワークショップの受け入れ責任教員）に終日参加していただき、必要に応じて参加者がスムーズにワークショップに取り組めるよう声かけやサポートを行っていただいた。

3.1. 三つのワークの詳細

①役作りワーク 9:00-10:00

演劇を用いたこのワークショップでは、参加者に6つのドキュメンタリー動画の中から1つをランダムに視聴してもらい、そこに登場する人物になりきって演技をしてもらうように指示をした。動画はYouTubeで視聴可能なもので、それぞれ、1. レズビアン、2. ゲイ、3. バイセクシュアル、4. トランスジェンダー、5. クィア、そして6.

表1. 当日のスケジュール

2023年9月2日(土)	
～開始～	
8:15～8:20	プロジェクターなどの接続と準備
8:20～8:40	説明資料を用い、著者とアシスタントの学生Tの自己紹介、シラバス、および1日の流れの説明
8:40～8:50	事前アンケートの回答
8:50～9:00	休憩（休憩時間に著者は事前アンケートの結果に目を通しておく）
9:00～10:00	①役作りワーク（役の割当動画の視聴を含む）
10:00～10:10	休憩（休憩の合間に著者と学生Tはお菓子を配布）
10:10～11:20	②自己紹介ワーク
11:30～11:40	休憩
11:40～12:00	③ディスカッション
12:00～12:15	まとめ
12:15～12:35	事後アンケート
12:35～12:40	お礼と片付け
～終了～	

LGBTQ以外のセクシュアル・マイノリティの方、に当事者の視点から焦点を当てた内容（自身のことや自身を取り巻く環境などドキュメンタリーやインタビュー形式でまとめられているもの）となっている¹。ワークショップで使用した6つの動画の詳細については表2を参照されたい。

参加者には、割り当てられた人物がどのような人物であるかのペルソナ（どのような性格、苦勞、そして考えを持っているのかなど、可能な限り細かく想像する）を設定してもらった。著者は、役作りに行き詰まったときのために、前方スクリーンに役作りのヒントを映し出してサポートをした。役になりきり、「内在化（自分ごと化）」させるためには、人物理解が必要である。そのため、役作りワークでは、与えられた役に対して、同じグループのメンバーとも積極的に役作りの意見を交換するように促し、与えられた役の想像を膨らませた。動画の中で、説明されていないようなこともあえて参加者に想像させ、「もし自分がこの人だったら…」という想像を促した。

②自己紹介ワーク10:10-11:10

休憩の後、自己紹介ワークでは、「役作りワーク」で、同じ動画を視聴したグループをバラバラにし、異なる役を割り当てられた参加者6～7人で新しいグループを形成した。そして、各々その役になりきって自己紹介をしてもらった。この自己紹介ワークでは、与えられた役になりきり、自分が演じる役に対して理解がほとんどない他の参加者に、「私」として一人称で自己紹介を行う。そうすることで、役の人物を自分の内に「内在化（自分ごと化）」させるのである。また、それと同時に自分が演じる役に対して理解がほとんど

特権とマイクロアグレッションへの気づき—演劇的手法を用いたジェンダーワークショップを通じて—

表2. ワークショップで使用了6つの動画の詳細

番号	名前	カテゴリー	動画の題名とサムネイル	動画の長さ
1	エリカさんと信子さん	レズビアンカップル	“子どもが欲しい”同性カップルが選択した新たな家族の形とは【SDGs】² 	5分2秒
2	平田金重（以下カネさん） と勝山こうへい（以下コッフェさん）	ゲイカップル	【特集】元消防士と元警察官の同性カップル 結婚式で歌われたのは別れを告げる曲 「さよなら大好きな人」込められた思いとは【報道ランナー】³ 	12分5秒
3	越智えり子さん	バイセクシュアル	【バイセクシュアル】「好きになった人が好きだけ」性に奔放なだけと誤解？理解されにくい現実も…LGBTの中でも疎外感“バイセクシュアル”を当事者に学ぶ【LGBT】⁴ 	6分54秒
4	柴谷宗叔さん	トランスジェンダー	母から「親不孝やで」と言われた LGBT 住職の寺「性善寺」は「LGBT のかけこみ寺」集う相談者 A さんの不安と葛藤に…住職はうなずく（2023 年 5 月 23 日）⁵ 	9分31秒
5	てつさん	ノンバイナリー	【ノンバイナリー】自分を男女の枠にあてはめずに生きる人たち【字幕】⁶ 	9分48秒
6	中村健さん	アロマンティック・アセクシュアル	【アロマンティック・アセクシュアルを知る】なかけんさん（中村健さん）⁷ 	2時間31分5秒 （前半1時間14分14秒までが中村健さんの内容。インタビュー形式で他の動画と比べて長いので、22分47秒～視聴できる範囲で生徒に抜粋して視聴してもらった。）

ない他の参加者からの質問を受け付け、それに答える時間を設けた。

③ディスカッション：11：30-11：40

休憩の後、最初の「役作りワーク」のグループで再びグループを形成し、このワークショップでどのようなことを学んだのか、どのような気持ちの変化があったのか、あるいは無かつ

たのか、どのような知見や気づきがあったのかなどを自由に議論してもらった。

3.2. データ収集と調査倫理

当日は42名の生徒の参加を予定していたが、諸所の理由でワークショップの開始時から参加した生徒は35名、遅れて参加した生徒が3名の合計38名が最終的に本ワークショップに参加した。参加者の背景と学びを分析するために、本調査・ワークショップでは、ワークショップ開始前の事前アンケートとワークショップ終了後の事後アンケートを参加者にWeb上から回答してもらった。事前と事後アンケート双方とも38名全員が回答したため、回答率は100%である。上記3つのワークショップ実施中は、それぞれのグループのテーブルにボイスレコーダー（iPad）を配置し、参加者たちの会話を録音した。なお、研究倫理への配慮として、データの収集に関しては下記の4点の確認をO高校の教員と参加者に行った。

- （1）O高等学校から本調査・ワークショップに関する同意、ワークショップ中の写真撮影・論文への掲載、および研究データの分析・使用の承認を得た。
- （2）研究対象者であるO高等学校の参加した生徒には研究の目的及び研究の主旨を当日説明し、匿名性の担保、本ワークショップへの協力は自由意志に基づくことを説明した。
- （3）本ワークショップの趣旨に同意した者のみアンケートに回答するよう説明した。
- （4）アンケートの中に、「答えたくない」という選択肢を設け、参加者が回答をしたくない場合はその選択肢を選べるように設定した。

尚、事前と事後アンケートのデータとワークショップで収集した音声データの発話者との対応付けは行われていない。また、事前と事後アンケートのデータを関連付けて、ワークショップ前後の学びを分析できるように調査設計を行なったが、当日の説明が不十分で必要なデータの収集には至らなかった。

4. 分析：内在化の過程と特権とマイクロアグレッションへの気づき

本節では、事前・事後アンケートの回答、前節で紹介した、3つワークショップで収集された会話の音声データの分析を行う。最初に、これらのデータから、どのように参加者たちが性的マイノリティの人々の世界観を内在化する過程を明らかにする。次に、自らの特権性とマイクロアグレッションを実際に行っていたことへの気づきが得られたのかを分析する。

「役作りワーク」と「自己紹介ワーク」の分析から、参加者における「内在化（自分ごと化）」の過程には段階的な進行が見られ、各段階において異なる種類の「気づき」が促されることが示唆された。ここでは、観察された事例に基づき、内在化に至るまでの過程を以下の4段階に類型化する。図示すると図1のようになる。

①理解・整理

第一段階として、参加者は自身が演じる役の置かれた状況、取り巻く環境、内面、心情など、様々な要素を理解・整理する。これは、役柄に対する知識のインプット段階と言える。

②共感・想像

第二段階では、前段階で得た知識を基に、参加者自身がその状況に身を置き換えて想像し、役柄と感情的な共感を試みる。

③なりきる

第三段階である「なりきり」において、参加者はより深く役柄に没入しようと試みる。事後アンケートの自由記述からは、参加者によって「なりきり」方のアプローチに多様性が見られた。具体的には、口調や仕草の模倣による外見的なアプローチ、自己と役柄との共通点に着目し同一化を図るアプローチ、自身の先入観を排除し白紙状態から役柄を構築するアプローチ等である。

④「内在化（自分ごと化）」

これらの段階を経て、最終的に参加者は役柄を「自分ごと」として捉え、他者に語るレベルにまで内在化を達成すると考えられる。

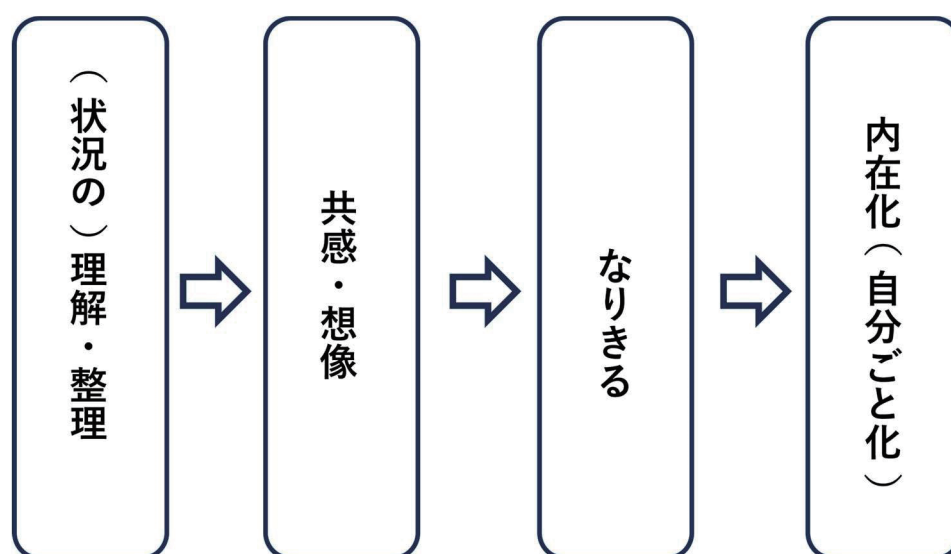


図1. 「内在化（自分ごと化）」までの過程

また、この内在化が深化する過程で、自らの特権性への気づきが起こり、それとともにマイクロアグレッションを実際におこなっていたことの気づきが起こっていた。

4.1. 参加した高校生の背景—事前アンケートの結果から

3つのワークショップが始まる前に、著者は事前アンケートを配布し参加者38名に回答してもらっていた。事前アンケートでは、参加者のLGBTQ+に対してのワークショップ

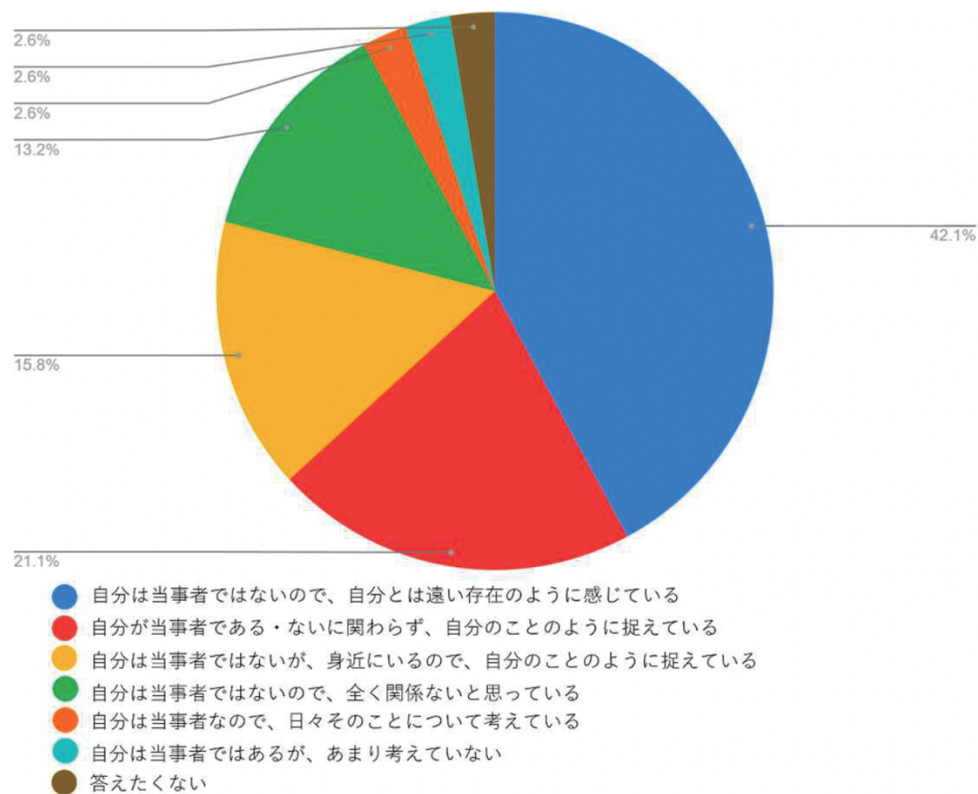


図2. LGBTQ+について自分に最も当てはまるもの (n=38、回答率100%)

前の理解度や自分ごとの内在化の度合いを知るための質問を設けていた。

事前アンケートにおいて、「あなたはLGBTQ+という言葉を知っていますか」という設問に対し、97.4%の参加者が「聞いたことがある」と回答した。この結果から、参加者の大多数がLGBTQ+という言葉を知っていることが明らかになった。また、「LGBTQ+について、自分に最も当てはまるものを選んで下さい。」という項目(図2)の中では、約半数の42.1%の参加者が、「自分は当事者ではないので、自分とは遠い存在のように感じている。」と回答していた。次いで多かったのが、21.1%の「自分が当事者である・ないに関わらず、自分のことのように捉えている。」という回答であった。また、「自分は当事者なので、日々そのことについて考えている」、「自分は当事者であるがあまり考えていない」が少数ながらもあったことから、当事者も含まれていたことが分かる。

4.2. 演技を通じた「内在化」の深化の過程

ここでは、3つのワーク、特に「役作りワーク」と「自己紹介ワーク」において、どのように参加者が、LGBTQ+の人々の役を内在化させたのかを音声データから分析を行う。まず、YouTubeドキュメンタリー動画を視聴して自ら役作りを行う役作りワークでは、積極的に話を進めるグループもあれば、じっくり各々が考えていてあまり議論が活発化しないグループの両方が見られた。しかし、最初は積極的に議論をリードする参加者が見ら

特権とマイクロアグレッションへの気づき—演劇的手法を用いたジェンダーワークショップを通じて—

れないグループでも、著者が教室を回っていく中で、「今何の話をしている？どんなことを考えている？」と質問すると、様々なことを各々が考えており、「それをみんなにも共有してみて」と伝えると議論が活性化していった。きっかけさえあれば参加者自身は考えを持っており、一度共有するとその後の議論もスムーズに進んでいった。自己紹介ワークの様子は図3の写真を参照されたい。

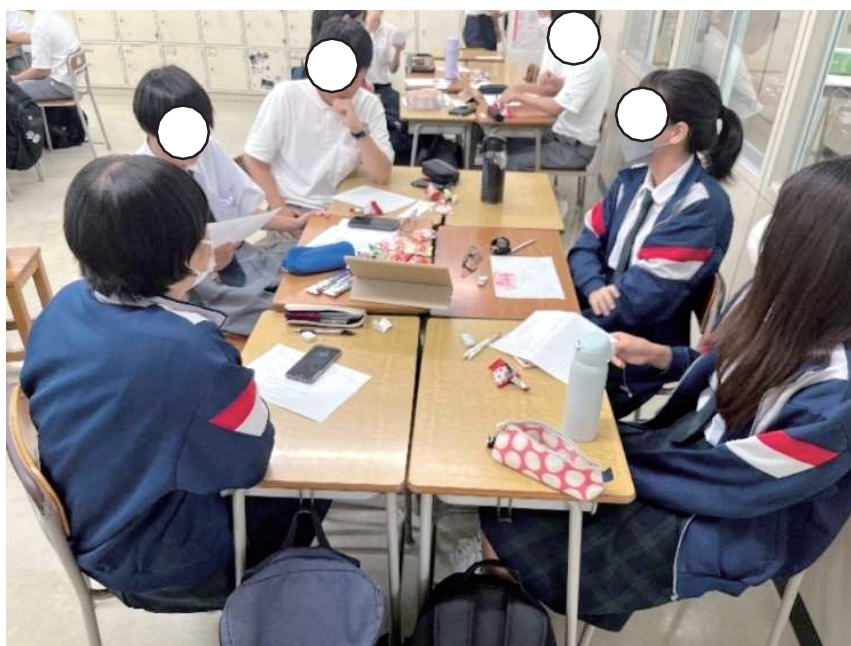


図3. 実際の「自己紹介ワーク」をしている場面

「状況の整理・理解」の段階と「共感・想像」の段階

役作りワーク序盤の内在化初期段階では、状況理解や整理から始まり、「もしその人だったらどういう行動をするのだろうか」、「どういう感情をどのような場面で抱くのだろうか」などといった視点から、想像する動きが多く見られた。下記は一つのグループの「役作りワーク」が始まってすぐの会話である。Mは男子生徒、Fは女子生徒をそれぞれ表し、それぞれ番号が異なると人物が異なる。また「」内が参加者の発言であり、「」がない場合は著者の分析の記述である。

役作りワーク中の会話（1）

- (M1) 「もう一回動画見ないといけないな……」
- (M2) 「もう1回みない？」
- (M1) 「おれらがエリカさんにみんなでなるってこと？」
- (F1) 「休日は何して遊ぶ…なりきってみたいなこと言ってたよね…子どもと遊ぶ？公園でのぶこさんと子どもと遊ぶにしよう。あとこれから迎える赤ちゃんもか…。」

(F2) 「どっちが生むの？どっちがエリカさんだっけ…？これは誰の子ども？」エリカさんの前パートナーとの子どもと、信子さんが現在妊娠中でこれから生まれてくる子ども（信子さんとは血が繋がっているが、エリカさんにとっては繋がらない子ども）というストーリーへの困惑が発生。

この会話は、著者が分類する「状況の整理・理解」の段階と「共感・想像」の段階に該当する。M1のワークのタスクの確認の後、F1が誰と遊ぶのかをエリカさんの動画で紹介された状況を理解し、想像を始めていることがわかる。

「なりきる」から「内在化」へ

そして、それぞれのグループは「状況の整理・理解」の段階と「共感・想像の段階」を経て、次のワークである「自己紹介ワーク」へ移行する。「自己紹介ワーク」に入るにあたって、著者は直前の休憩で各グループのテーブルにお菓子を配り、参加者には自由に食べながらワークに参加してもよいと伝えた。その効果もあってか、参加者の中に笑顔や話し声が増え、「ワーク」として捉えるのではなく、実際の「自己紹介」のように、徐々に談笑する様子が見られた。

「自己紹介ワーク」の序盤では、多くの参加者が一人称を演じる役に合わせてなりきろうという姿勢が見られたが、まだ慣れておらず困惑や戸惑う様子も見られた。下記は、一グループの最初の自己紹介の様子である。

自己紹介ワーク中の会話（1）

- エリカさん（F3）： 「私はエリカです。パートナーの信子さんと子どもと3人で暮らしており、いま子どもがお腹の中にいるのですが…」と自分の悩みなどを自分ごととして話す様子が見られた。経歴などを聞かれて一瞬戸惑う。
- 中村健さん（F4）： 質問に対して「多分～」などの言葉が出ている。「最近嬉しかったことはドーナツを食べられたことです。」と動画内でドーナツが好きと言っているのを参考に自己紹介を行い、なりきろうとしている場面も見られた。また、「あんまりみんなは聞いたことないと思うけど、私は～」と自身について説明。
- 柴谷宗叔さん（F5）： 自己紹介の際に、自分の家族構成などを先に話し、「母が認めてなくて…」と悩みや苦しみを打ち明ける。
- 越智えり子さん（F6）： 「私は、バイセクシャルです。」と話始め、家族構成などもえり子さんになりきって話していた。「趣味はアクセサリー作りです。最近ハマってることは、観葉植物。嬉しかったことは～」などの詳細まで自分のように話す。

てつさん（M3）： 「出身は多分～」という言葉で自己紹介をスタート。「なにものでもない（男性でも女性でもない）みたいな感じで～」と自身について説明し始め、“they”の説明を他の人に分かるように伝える。「他人に「くん」付けされるのも嫌みたいです…嫌です！」と言い直す。

エリカさんを演じるF3は、自己紹介で困惑をしていた。最初は自分のこととしてグループで話し合って想像した人物像のもと自己紹介を行っていたが、経歴などの想定していないところを質問された際に戸惑いを見せた。中には、無意識に「多分」や「おそらく」などの言葉を使ってしまい、周りから指摘されたり自身で気づき直す中村健さん役のF4や、てつさん役のM3のような参加者も多く見られた。一方で、柴谷宗叔さん役のF5や、越智えり子さん役のF6のように序盤の早い段階からいきいきとその人物であるかのようなレベルまで役作りを完成させている参加者も見られた。

一通りの簡易な自己紹介が終わった後、なかなかお互いに質問できない状況が見られた。役をまだ自分の中に落とし込めていないという不安感や相手もそうなのではないかという雰囲気から、あまり踏み込んで質問を聞くことができない様子だった。そのため、著者は「自分がその人物であると想像して、できる限りなりきってみて！本当に自分だと思って！想定外の質問に戸惑うこともあるかもしれないけど、話し手にしっかり関心をもって知らないことや疑問に思ったこと小さなことでも色々質問してみて！」と伝え、同席していたM先生からも同様の激励が入ったことで、中盤の雰囲気が打って変わった。それまで停滞していた自己紹介が活性化され、これまで口を開いていなかった参加者たちも次々に発言するようになってきた。これは、「内在化（自分ごと化）」の「なりきる」の段階に該当する。

著者は続けて、「自己紹介ワーク」終盤に向かうにあたって、「次は質問を投げかけて、その後にもっと深掘りしてみて。」という声かけを行った。そうすると、以下のような場面が見られた。

自己紹介ワーク中の会話（2）

中村健さん（F7）： 「高校生とか学生の時に、なんか、好きなタイプとかあるじゃん。恋バナとか、そういう時に居づらくなって…。最初、タイプなんなの？って聞かれたときは、想像のタイプを作り上げて言っていた。せっかく話しかけてくれているのに遠ざけている感じがするのが嫌だったから頑張って会話を続けようとした。」

周囲のリアクション： 「やば。大変だな…。」

中村健さん（F7）： 「なんか恋愛ソングとかも、『大好きな恋人』のようなフレーズが出てきたとしたら、『恋人』の部分を好きな『ドーナツ』などに

置き換えたりして考えてた。」

周囲のリアクション：「へえ！なるほどね…」

上記のように、参加者は質問を通じて他者の生活を深掘りしていく中で、前半から中盤までで見られた一問一答の形式にとらわれず、その人物の内面やライフストーリー、バックグラウンドなどバックボーンとなる部分が聞けるようになっていった。また、上記のF7のように、質問されていなくても次々と自分の感情や状況を周りに伝えることができるようになる参加者も多く見られるようになった。これも、「内在化（自分ごと化）」の「なりきる」の段階に該当し、序盤・中盤にくらべ、「なりきる」の度合いのさらなる深まりが見られた。

まとめると、「自己紹介ワーク」には、序盤・中盤・終盤で参加者の「内在化（自分ごと化）」の度合いにも変化が見られ、ワークが進むにつれより「内在化（自分ごと化）」が促されていた。序盤は、基本事項などの一問一答のような形式で、どこか他人のことを語るような口調で「多分～」などと言った言葉を用いていた参加者が多く見られていた。しかし、中盤になるにつれて、増えてくる想定外の質問にもその人物であるかのように口調なども真似し答えられるようになってきた。そして終盤では、話す側と聞く側という、より対談に近い形式になり、質問をされずとも自ら語り始めるような場面が見られた。

4.3. 内在化の過程での特権とマイクロアグレッションへの気づき

「役作りワーク」や「自己紹介ワーク」を通じて、参加者は、性的マイノリティの人生と世界観を内在化する過程で、自らの特権とマイクロアグレッションに気づくシーンが散見された。「役作りワーク」の中盤から終盤では、序盤の内在化初期段階とは異なり、自身の抱いていた当初の印象や偏見の存在に気づき始めるシーンが見られた。これは、自分の存在だけでなく、役の人物の状況や感情を想像する中で内在化される「もう一人の自分」が頭の中に共存していくことで、自身の持っている偏見や、自らが過去に行っていたかもしれないマイクロアグレッションに、その役の人視点から気づいていくのである。

役作りワーク中の会話（3）

- (M4) 「なんかさ～、ゲイとかレズとかだったらさー、女の子だったら誰でも好きってなるやん？男だったらみたいなの。って俺らは思うけど、実際その人にも好みがあるから…そういうの偏見じゃん？」
- (F8) 「それは自意識過剰じゃん？」
- (M4) 「怖いっていうか…なんか…もしかしたらってっていうなんかあるやん…そういうのも別に友達として接したいけど、その可能性もあるからどういうふうに接したら良いかわからない場面もある。」
- (M4) 「なんもないってわかってる人だったら、普通にじゃれたりできるけどさ、100%

同じ対応をしていいのかっていうと…。」

(M5) 「でもそれってさー、生まれてきてから今までの経験じゃん…？今までさ、男子が女子好きみたいなこの偏見とかがなかったら、例えば女子が男子にグイグイ来たところで、接し方はもしかしたら変えないかもしれないけど、同性だった場合は多少意識するわけじゃん…。今までの経験とかが歪めてるのかも…、対応とかを。」

ここでは、M4が、同性が恋愛対象になる人も異性が対象となる自分と同じだと認識した上でも、それでも心の中でどのように接すればいいのか葛藤があると共有した。M4は今まで自分とは別だと切り離していた「ゲイ」や「レズビアン」のイメージを、一度「内在化（自分ごと化）」したことによって、自分とあまり変わらないのかもしれないと気づく。しかし、気づいた上で、自身の中でうまく接することができない・対応できないという葛藤があることを自覚する。それを受け、M4は、それは自分たちの中の偏見や「普通だ」と思っていることがその人たちへの対応を歪めているのだと主張した。その葛藤は、同性が恋愛対象となる人に向けられたようにM4は捉えているが、M4の中で作られた偏見や固定概念によって認識が歪められているのかもしれないという鋭い指摘は、このグループに「気づき」をもたらし、更に「内在化（自分ごと化）」の度合いの深まりが見られたように思われる。

「自己紹介ワーク」が終わり、一緒に役作りをしたメンバーと再び話す「ディスカッション」では、自分はマイクロアグレッションとどう向き合っていくべきなのか、自分がマイクロアグレッションをしてしまっていたかもしれないと思ったことなど様々なことが語られた。

ディスカッション中の会話（1）

M6： 「マイクロアグレッションについては、僕やっちゃったことがあって、友達と友達が、男同士でじゃれてたときとかに、“ホモやん”みたいなことを言っちゃって、それでもし傷ついてたら申し訳ないなと思った…。え、あるよね？」

M7： 「なんか、身の回り、なんか別の世界の存在だって感じていた節があって、LGBTとか言うけど流石に俺の周りの友達はやろって思った。」

F9、M6： 「たしかに…」

M6のように、自分自身がマイクロアグレッションをしてしまっていたことがあるかもしれないと初めて自覚するような場面も各グループで見られた。特に中学生・高校生という年代について述べているグループもあり、その年代的なノリ（面白さ）がありその発言をしてしまっていることがあると分析するグループもあった。また、すでにカミングアウトしている友人の話をするグループもあり、その子とそのノリを気にしない子だと（こっ

ちは) 思っている、(その子との) 関係性とかによって、当人にとっての人の線引きや、範囲などが各個人違うから全員があたかもその人をそういうふうにいじってもいいととらえているのは、間違っているかもしれないなどといった意見が寄せられた。

また、別のグループでは、性の多様性と流動性、不確定さへの気づきへの言及があった。

ディスカッション中の会話 (2)

M7: 「なんていうか難しいけど、少なからずLGBTQ+の中に何個か当てはまる人って絶対いると思う。絶対人としてあると思う。それがどういうものかっていうのは、まだ多分、絶対わからない。多分自認もできてないもできてないと思う。それで、自分がどういうものを持っているのかというのを知るのは大切だと思うし、例えば自分がそうだった場合の対応の仕方も学べたのでよかったのではないかと思います。」

M7が言うような、「少なからずLGBTQ+の中に何個か当てはまる人って絶対いると思う」という言及は、性のあり方が単一的でなく、流動的、または不確定なことへ気づきであり、「多分自認もできてないもできてない」人の存在への気づき、そして、「例えば自分がそうだった場合の対応の仕方も学べた」と言うように、自らの性のあり方が将来変わることへの可能性の気づきも得ていることが見受けられる。

また、「ディスカッション」で多く聞かれたのが、「難しい」、「どうしたらいいのだろう」、「何が正解なのかわからない」、「相手がどういうふうに接してほしいのかわからない」、「どこまで配慮したらいいのかわからないし、逆に配慮されるのがどこまで嫌なのかわからない」といった声だった。これらの反応は、参加者自身が「内在化 (自分ごと化)」の過程にあることを示唆しているのではないか。これまで「正しい」とされてきた言動が、実は誰かを傷つけていた可能性に気づき、戸惑いや葛藤が生じていると考えられるのである。「どこまで配慮したらいいのかわからない」という意見は、「配慮」という選択肢を知ったからこそその発言である。「何が正解かわからない」という意見は、「何が正解かは人によって違う」と認識したからこそその意見である。「どうしたらいいのだろう」も同様に、答えが出ないもしくは自分にとっての答えと受け手の答えが違う場合があるかもしれないという可能性が考慮された上での現段階の答えなのではないだろうか。これらの難しさや疑問は、「内在化 (自分ごと化)」の失敗ではなく、「内在化 (自分ごと化)」の過程でもある。

今までは、どこか遠い自分とは別世界にいると感じていた人々を「内在化 (自分ごと化)」することで、身近にいるかもしれないと気づき、自身の認識している世界の範囲と実際の範囲の違いを認識することがある。今まで何も気に留めることなく発言していた言葉たちが実は誰かを傷つけていたかもしれないと省みるからこそ、「マイクロアグレッション」・「特権」を知ったからこそ、そして「内在化 (自分ごと化)」できたからこそ見えてくる、「受容的共感」の一步先にあるものなのではないか。本ワークショップは、答えを出すも

のではなく、あくまで入り口であり、今までの自分の行動や考えに選択肢や引き出しを増やすことを目的としている。正解が1つではない、自分が認識している世界が全てではないと自身の持っている世界の見方や枠組みをもう一度捉え直すというきっかけになっているという点で、新たな教育的効果を生んだと言えるのではないだろうか。

4.4. 事後アンケートから見る学びと演劇的手法の効果

まとめ後の事後アンケートでは、質問項目も多い上に自由回答記述欄が多かったため、事前アンケートより時間をかけて回答している参加者が多かった。ここでは、主要な質問への回答を紹介する。尚、著者は事前アンケートと事後アンケートにおいて参加者の性別を回答する質問を作成しなかったため、回答者の情報は何役を担当した参加者かのみを記述する。

役作りの難しさ

「役作りをしていく上で難しかったことを教えてください。」という問いに対して、多くの参加者が「自分自身の立場から自分とは全く違う人を想像する限界と難しさ」について回答していた。実際の回答例は以下の通りである。

「自分が同じ境遇にいる訳では無いから、完全にその人の立場に立って考えることが難しかった。」(エリカさん役)

「自分はこの人ではないのでこの人がどんな時に傷ついたり嫌だなど思うのかと考えた時に自分視点から考えてしまうのですごく難しかったです。」(越智えり子さん役)

また、本ワークショップでは、他者の生き方を想像する難しさと相手のことを限られた情報から想像し、共感し、なりきることに重点を置き、積極的に他者を理解しようと努めることを促した。しかし、予想通り、参加者からは情報不足や想像力の限界に対する難しさが多く語られた。実際の回答例は以下の通りである。

「足りない情報を予想しながら話さないといけないこと (が難しかった)。」(コッフェさん役)

「趣味や性格など動画では知れなかったことを考えるのが難しかったです。」(柴谷宗叔さん役)

演じた役に関する学び

参加者は役作りの難しさを指摘する傍ら、演じた役に関する学びも得ていた。「自分の演

じた役に関する学び」は何かという問いに対しては、それぞれが演じた人物にまつわる社会状況や環境などに関する学びを多くあげられていた。実際の回答例は下記の通りである。

「同性婚が認められていないことだったり、同性婚は異性同士の結婚と比べて不利な状況にあること。」(エリカさん役)

「LGBTの中でも、バイセクシュアルは同性愛者に『同性だけでなく異性もなら仲間じゃない』と扱われることもあると知ってびっくりしました。」(越智えり子さん役)

「例えたくさんの他人に自らの性別を理解されたとしても、親という一番身近な人にわからない、と言われることがあるのだと少し驚きました。」(柴谷宗叔さん役)

参加者は、実際になりきることの苦労以外にも、演じた役の人々の経験する生活の困難性への知識を獲得していた。

そして、自身が演じた役に対するワークショップ前後のイメージの変化を問う質問では、自分の無自覚なマイクロアグレッションや偏見、差別の意識を自覚するコメントも多く見られた。また、法的な制約や周囲の理解のなさからの生きづらさを実感するようなコメントや、カミングアウトの困難さ、マイノリティ内での偏見の存在への気づきなど様々な気づきがあったことが見受けられた。その一方で、元々ある程度の知識があったので変化は少ないと答える参加者も見られた。実際の回答例は以下の通りである。

「そもそも第一印象が男か女かわからないというようなマイクロアグレッションを含んでいたのも、ワークショップ後には相手には相手の生き方があり、そのことを自分が腑に落ちるよう無理やり当てはめていたのだと気づきました。」(柴谷宗叔さん役)

「私は今までLGBTだったりジェンダーのことについて偏見を持っていないつもりだったけど、当事者の話を聞いて疑問に思ったことを友達に話したら、『それが偏見なんじゃない?』と言われて、自分も知らないうちに差別をしていたのかもしれないと気づいた。」(てつさん役)

「今ではLGBTの話が普及していて元からあまり偏見などなかったのであんまり変化がなかった。」(エリカさん役)

「柴谷さんはトランスジェンダーの方だったけれど、トランスジェンダーについてはテレビなどで情報を見ることがよくあったので、あまりイメージは変わらなかった。」(柴谷宗叔さん役)

特権とマイクロアグレッションへの気づき—演劇的手法を用いたジェンダーワークショップを通じて—

マイクロアグレッションと特権に関する自覚レベルとその理由

リッカート尺度を用い、ワークショップ参加前に比べての「特権」や「マイクロアグレッション」について自覚レベルの変化を、自覚レベルが著しく減少したが「-5」、変化なしが「0」、自覚レベルが著しく向上した、を「+5」の11段階で選ぶ問いには、「+5」を選んだ参加者が15.8%、「+4」が15.8%、「+3」が44.7%、「+2」が18.4%、「+1」が2.6%、「0」が2.6%であり、97%の参加者がワークショップ前に比べ、大小はありつつも自覚レベルが向上したと回答しており、この演劇的手法を用いたジェンダーワークショップを通じて多くの参加者が特権性とマイクロアグレッションへの気づきを得ることができたといえるだろう。

また、それぞれの自覚レベルを選んだ理由については下記のようなコメントが挙げられていた。

5と回答した参加者

「役作りを経てその人の視点に立つことでどのようなことがマイクロアグレッションにあたるかが分かったから。」

4と回答した参加者

「これまでマイクロアグレッションという言葉を知らなかったし、その言葉について考えたことがなかったので、自覚レベルが上がった。」

3と回答した参加者

「なんとなく考えてはいたけど、今回しっかり知識として学んだことで意識が変わった。」

「今まで1回は思ったことがある事を言語化されて自覚出来たけど、まだまだ深く考えればもっと理解が深まると思ったから。」

2と回答した参加者

「自らの発言を顧みて悩み、できる限り人を傷つけない言葉選びをするよう心がけているつもりだったけど、無意識的に良いとは言えない発言をしてしまっていることもあったと思う。また、自らがなんの疑いもなく普通に暮らしているだけでも性的マイノリティの方々からしたら本当に羨ましいことなのかもしれない、などを考えたことがなかったからです。」

様々なコメントから、多くの参加者がマイクロアグレッションという概念を初めて知り、自分の言動を振り返る良い機会になったと受け止めていると見受けられた。共通のキーワードとして、「無自覚だった自分の偏見・差別意識を自覚できた」や「言葉遣いや行動への注意が必要だと実感した」というコメントが占めている。一方で、「完全に自覚するのは難しい」や「気を付けていても無意識的にしてしまう」といったジレンマもあることが窺える。マジョリティが持つ「当たり前」の意識や言動がマイノリティにとっては差別だと気づくことの難しさがある一方で、継続的な気づきと試行錯誤が必要だと認識させら

れる回答も見られた。

5. おわりに

昨今のジェンダー教育や多様性推進のための教育においては、思いやりや受容する心などの「受動的共感」を育む教育への批判（出口 2021）から、マジョリティ側が持つ特権を「意識化」させることを促すワークショップ形式の教育実践が広がってきた（渋谷 2021; 大阪府外国人教育研究協議会 2017; 出口 2021）。本稿は、「演劇的手法」（渡部 2009; 藤井 2019）を用い、LGBTQ+のドキュメンタリー動画視聴とロールプレイングを通して、参加者に性的マイノリティの困難を「内在化（自分ごと化）」させ、自らの特権性とマイクロアグレッションを行っている可能性の気づきを促すことを目的としたワークショップを実施した実践報告である。

第4節では、本演劇的手法を用いたワークショップの参加者は性的マイノリティの世界観を、①理解・整理、②共感・想像、③なりきる、④「内在化（自分ごと化）」の4つの段階を経て内在化していること示した。参加者は序盤では戸惑いが見られたものの、徐々になりきりが進展していくにつれ、他者の生き方を自分事として捉えられるようになった。また、演じている性的マイノリティの人々の困難を伴う人生と世界観の内在化が深化していく過程で、参加者は自分の無自覚な偏見や差別的発言といった「マイクロアグレッション」や「特権」に気がついていった。これは、自らの世界観に、演じる性的マイノリティの世界観が参加者の頭の中で同居する中で起こる気づきであり、自分の世界観の狭さを知り、アイデンティティの多様性や流動性への理解が深まり、固定観念の相対化もなされていった。事後アンケートの結果からも、97%の参加者がワークショップ前に比べ、大小はありつつもマイクロアグレッションへの自覚レベルが向上したと回答しており、このジェンダーワークショップを通じて多くの参加者が特権性とマイクロアグレッションへの気づきを得ることができたといえるだろう。勿論、このような教育的ワークショップ後の教育効果を測定すれば予々肯定的な結果が得られるものでもあるため、内在化を促したことによる長期的な効果について検証することも今後必要なのかもしれない。

本報告の貢献は2つある。まず、ジェンダー教育にとどまらず、マジョリティが特権に自覚的になるため教育実践の選択肢に、「演劇的手法」が有用であることを示した。また、本ワークショップは、筆頭著者である大城が、卒業論文のプロジェクトとして、企画・運営を行える教育実践のモデルを示すものとして取り組んだものでもあるため、大学教員だけでなく、本テーマに十分な知識を持つ大学生もまた、ジェンダー教育に貢献することができるモデルを示すことができたと言える。

最後に、本研究の限界を2点指摘したい。本ワークショップは、著者と関係の深いO高校の1クラスを対象に実施したため、参加者の学習意欲が高く、積極的な発言が多く見受けられた。しかし、この結果は、対象者が限定されていること、および著者との関係性に

よる影響を受けている可能性があり、一般化するには注意が必要である。今後、より多様な属性の参加者を対象としたワークショップを実施し、その効果を検証していく必要があるであろう。

ワークショップのデザインにおいては、参加者を「マジョリティ」と想定したような実施となったが、実際には38名の参加者のうち2名がLGBTQ+当事者であると回答していた。実際に、当事者らの本ワークショップ体験や、企画・運営における配慮が十分であったかについては、十分に検証することができなかった。出口（2021）が指摘をするように、私たちは性的指向だけでなく、性別、人種、性的指向、社会階層、年齢等、様々な属性において、「マジョリティ」としてと「マイノリティ」としての両方の経験を重層的に有していると言える。今後は、「マジョリティ」と「マイノリティ」という二項対立的な枠組みにとらわれないワークショップの構想も課題となるであろう。

本稿は、大城歩葉による卒業論文『「特権」から日常の中のマイクロアグレッションの自覚—実践型ジェンダーワークショップを通して—』（千葉大学国際教養学部国際教養学科現代日本学メジャー、2024年3月提出）に、主指導教員である五十嵐洋己とともに改定を加えたものである。

注

1. LGBTQ+とは、レズビアン（Lesbian）、ゲイ（Gay）、バイセクシュアル（Bisexual）、トランスジェンダー（Transgender）、クィア/クエスチョニング（Queer/Questioning）などの頭文字を取った言葉である。この「+」は、LGBTQ以外のセクシュアル・マイノリティ（インターセックス、アセクシュアルなど）も包含することを示している。LGBTQ+という用語は、異性愛と二元的性別規範から外れるあらゆるセクシュアル・マイノリティの存在を示す包括的な言葉として、1990年代以降使われるようになった（Jackson 2006）。「LGBTQ+」という言葉は多様化しているが、本研究では上記の定義を用いた。また、補足として記述すると、本研究では、高校生の理解を助けるためにLGBTQ+という分類カテゴリーを用いて調査を行った。しかしながら、ノンバイナリーがクィアに含意されていることや、+に含まれるアイデンティティの多様性を考慮する必要がある。また、当事者の中には、このような分類自体を望まない場合もあり、セクシュアル・マイノリティのアイデンティティとカテゴリーは時代とともに変化し続ける流動的なものであることに留意してもらいたい。本研究で用いた分類はあくまで、高校生の理解を助けるための簡易的なものであり、より複雑な現実があることを認識し、分類ではなく当事者一人ひとりの生の経験や人物像に注目することが目的であることを理解してもらいたい。
2. YouTube. [オンライン動画] TBS NEWS DIG Powered by JNN —「子どもが欲しい」同性カップルが選択した新たな家族の形とは【SDGs】 <https://www.youtube.com/watch?v=JHTEfBidoqM>（参照 2024/01/14）
3. YouTube. [オンライン動画] 関西テレビ NEWS —【特集】元消防士と元警察官の同性カップル 結婚式で歌われたのは別れを告げる曲「さよなら大好きな人」込められた思いとは【報道ランナー】 <https://www.youtube.com/watch?v=bVmIGfHGfU>（参照 2024/01/14）

4. YouTube. [オンライン動画] 3bema Prime—【バイセクシュアル】「好きになった人が好きなだけ」性に奔放なだけと誤解？理解されにくい現実も・LGBTの中でも疎外感“バイセクシュアル”を当事者に学ぶ【LGBT】 [youtube.com/watch?v=0po-MgbQiqI](https://www.youtube.com/watch?v=0po-MgbQiqI) (参照 2024/01/14)
5. YouTube. [オンライン動画] MBS NEWS—母から「親不孝やで」と言われたLGBT住職の寺「性善寺」は『LGBTのかけこみ寺』集う相談者 3さんの不安と葛藤に…住職はうなずく (2023年 5月23日) <https://www.youtube.com/watch?v=xhy5Uz7nZjU> (参照 2024/01/14)
6. YouTube. [オンライン動画] HOME 広島ニュース—【ノンバイナリー】自分を男女の枠にあてはめずに生きる人たち【字幕】 <https://www.youtube.com/watch?v=Wgnso65HT5s> (参照 2024/01/14)
7. YouTube. [オンライン動画] TBS ラジオ公式【アロマンティック・アセクシュアルを知る】なかけんさん (中村健さん) <https://www.youtube.com/watch?v=V53a2KaRRdM> (参照 2024/01/14)

参考文献

- 藤井満里子, 2019, 「演劇的観点から見た学生の学びにおける「自分ごと化」についての一考察」『キリスト教教育研究』36: 41-62.
- 出口真紀子, 2021, 「論点3 みえない「特権」を可視化するダイバーシティ教育とは？」岩淵功一編『多様性との対話: ダイバーシティ推進が見えなくするもの』青弓社, 165-174.
- Greene, Maxin, & Megan Boler, 2004, *Feeling Power: Emotions and Education*, London: Routledge.
- 岩淵功一, 2021, 「多様性との対話」岩淵功一編『多様性との対話: ダイバーシティ推進が見えなくするもの』青弓社, 11-35.
- Jackson, Stevi, 2006, "Interchanges: Gender, Sexuality and Heterosexuality: The Complexity (and Limits) of Heteronormativity," *Feminist Theory* 7(1): 105-121.
- 釜野さおり・石田仁・風間孝・平森大規・吉中崇・河口和也, 2020, 『性的マイノリティについての意識: 2019年(第2回)全国調査 報告会配布資料 (JSPS 科研費 (18H03652))』「セクシュアル・マイノリティをめぐる意識の変容と施策に関する研究」(研究代表者広島修道大学河口和也) 調査班編.
- くまのみ・クツシタカラ・鈴木茂義・出口真紀子・永井萌子, 2021, 「FD 講演会 LGBTQ+がいることを前提とした授業づくり: 特集3 大学の中で LGBTQ+の居場所を学生と共につくっていくこと」『グローバル・コンサーン』3: 181-198.
- Lenski, Gerhard Emmanuel, 1984, *Power and Privilege: A Theory of Social Stratification*, Chapel Hill: UNC Press Books.
- McIntosh, Peggy, 1992, "White Privilege and Male Privilege: A Personal Account of Coming to See Correspondences through Work in Women's Studies." M. Andersen & P.H. Collins eds., *Race, Class, and Gender: An Anthology*, Belmont, CA: Wadsworth Publishing, 70-81.
- 森茂岳雄, 2019, 「社会科における多文化教育のカリキュラム・デザインと単元開発」森茂岳雄・川崎誠司・桐谷正信・青木香代子編『社会科における多文化教育—多様性・社会正義・公正を学ぶ』明石書店, 60-80.
- 元山琴葉, 2022, 「現代日本社会の「同性愛歓迎ムード」に潜む差別の危険性: マイクロアグレッション概念を鍵として」牟田和恵編『フェミニズム・ジェンダー研究の挑戦: オルタナティブな社会の構想』松香堂書店, 116-129.
- 大阪府在日外国人教育研究協議会, 2017, 『ちがいをドキドキ 多文化共生ナビ〜在日外国人教育実践プラン集〜』大阪府在日外国人教育研究協議会.

特権とマイクロアグレッションへの気づき—演劇的手法を用いたジェンダーワークショップを通じて—

渋谷恵, 2021, 「特権を意識する—日本の大学における授業実践を通して—」 坂本光代編 『多様性を再考する—マジョリティに向けた多文化教育』 明石書店, 90-103.

Sue, Derald Wing., & Lisa Spanierman, 2010, *Microaggressions in Everyday Life: Race, Gender, and Sexual Orientation*. John Wiley & Sons. (マイクロアグレッション研究会訳、2020, 『日常生活に埋め込まれたマイクロアグレッション—人種、ジェンダー、性的指向: マイノリティに向けられる無意識の差別』 明石書店)

渡部淳, 2009, 「ドラマワークとコミュニケーションの変容—獲得型学習モデルおよび教師研修モデルに関する試案」『異文化間教育』 29: 40-49.

Winner, E., T.R. Goldstein, & S. Vincent-Lancrin, 2013, *Art for Art's Sake? The Impact of Arts Education*, Paris: OECD Publishing.

謝辞

本ワークショップに参加・協力いただいた、O高校の先生、参加した生徒の皆様に厚く御礼申し上げます。